

じょうかまち
城下町

鳥栖市教育委員会



発掘された町屋跡

平成元年度に県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査が行われ、勝尾城下町の総構の空堀、山浦新町地区で戦国期の町屋跡が発見されたことによって、勝尾城下町遺跡が注目されるきっかけとなりました。その後の調査で、本城の勝尾城、4ヶ所の支城と、4ヶ所の空堀で谷間を遮断した中に武家屋敷や町屋を配した、戦国時代の大規模な城下町遺跡であることがわかってきました。(シリーズNo. 1参照)

その構成は、空堀で区切られた4ヶ所の空間それぞれに特色があり、一番奥は筑紫氏の館を中心とした空間で、館跡の東には勝尾社があります。館跡の前面には江戸時代の絵図によれば「諸氏の屋敷跡アリ」と記されており、また空堀と道が交差する場所には「カワラモン」(瓦門?)という地名が残っています。この空間が筑紫氏の領地支配の中核であったと考えられます。

二番目は高取城の北側で、(伝)春門屋敷から東の(伝)大手口にかけて石垣を使った武家屋敷群が連なっていたことが発掘調査で確認され、なかには建物の柱が腐らずに残っている所もありました。

三番目は葛籠城の北、城の背面にあたる四阿屋川との間の空間で、武家屋敷、直線の道路と区画された地



総構の空堀



武家屋敷虎口



武家屋敷石垣



腐らずに残った柱

割りがみられ、四阿屋川との間の段丘崖には石積みと土塁が残っています。

谷を出て、葛籠城から延びる空堀と総構の空堀の間が四番目の空間です。この地区が平成元年に発掘調査を行った山浦新町地区です。一番外側の総構の空堀は、両側に土塁を築き、幅約10m、深さ約5mのV字型で、丘陵部を横断して城下町を守っていました。出入り口にあたる土橋も確認されています。また、この外側では遺構は確認されず、城構えの外を表すと思われる「カマノホカ」という地名が残っています。総構の土橋から北西約240mの延長上に地元で「勝尾城の登城道」と呼ばれる直線道があり、この両側から戦国時代の町屋跡と見られる掘立柱の建物群が確認されました。幅約10mの道の両側に、間口が狭く奥行き長い短冊型に建てられた80軒ほどの町屋が、約200mにわたって建ち並んでいたようです。また、焼けた痕跡のある柱、火縄銃の弾丸も出土しており、天正14年（1586）鳥津軍によって焼き討ちされたという伝承を示すものと思われます。さらに出土した陶磁器や土師器は、16世紀の後半のもので勝尾城下町の最終段階にあたり、このことも伝承の時期と一致します。このようなことから山浦新町の「新町」は「勝尾城下町の中に新しく造られた町」という意味だと思われます。



出土遺物（陶磁器・瓦・鉛玉）